

3Fのサインパネル。色によってエリアがはっきりと分かるように工夫されている。



病棟の4つの区分のうち、Dエリアには、生命力にあふれたひまわりのパネルが設置されている。

特集
1

癒される療養空間とは？

～デザインによる優しさ・機能・快適さ～

デザインや色は、療養空間にどんな効果があり、どのような「癒し」をもたらすのでしょうか。病院と福祉のトイレ17号では、埼玉石心会病院と、公立陶生病院の事例に学びながら、優しさ・機能・快適さにつながる空間や水まわりのデザインについて探ります。

事例紹介 埼玉石心会病院

生命を癒し、力を与える「環境デザイン」による医療環境。



1Fの総合案内。落ち着いた色のある壁面の色彩が美しい。



手術室の廊下。明るい色彩が手術前の心を和ませ、曲線の天井照明によって光が誘導する空間になっている。

救急医療の現場ですべての人々のストレスを和らげ、癒しを与える環境。

「断らない医療」「患者主体の医療」を理念に、急性期医療の場として地域に貢献している埼玉石心会病院。2017年11月に、狭山市駅西口至近に新築移転しました。埼玉西部地区の狭山市・入間市・所沢市・飯能市・日高市の5市を中心とした中核病院をめざし、最先端の低侵襲脳神経センター、心臓血管センター、ER総合診療センターの3つの臨床センターを有しています。

重篤な症状や、緊急事態への対応が多い救急医療の現場では、患者さん、来院者、医療スタッフ、そして関わるすべての人々のストレスを和らげ、癒しを与えられる環境づくりが求められます。そこで、建築、インテリア、ランドスケープなどのすべての要素を「環境デザイン」と定義した、医療環境のデザインが行われました。



病院の前には生命力のシンボルである樹齢300年のオリーブの木が植えられている。



各階のリハビリコーナーのガラスには樹木のアートが描かれている。

- 埼玉石心会病院**
- 竣工年月 / 2017年8月
 - 所在地 / 埼玉県狭山市入間川2-37-20
 - 施主 / 社会医療法人財団 石心会
 - 設計・インテリア / 株式会社山下設計
 - ランドスケープアート / 株式会社スタジオゲンクマガイ
 - 照明基本デザイン / LIGHTDESIGN INC.
 - サイン / 島津環境グラフィックス株式会社
 - 延床面積 / 34,945.78㎡
 - 病床数 / 450床



ラベンダーなどの植栽が、スタッフの気分を和らげている屋上庭園。

院長先生からの声

デザインや色彩を、スタッフの活力にしたいと考えました。

デザインは、前向きな気持ちになるための推進力でもある。



病院長
低侵襲脳神経センター長
石原正一郎さん

私たちは「断らない医療」「患者主体の医療」を理念とし、日々取り組んでいます。ただしこれを実践するスタッフはとても大変です。厳しい現実の中で覚悟を決めることや、どれだけ前向きな気持ちで、患者さんのお世話をすることができるかが大変重要だと思います。患者さんのお世話をするスタッフを支える病院は、現場でもあり、環境でもあります。目に入るデザインや色彩、光などによって人が受ける印象は大きく違い、面積や体積では語れない広がりを生み出すこともできます。

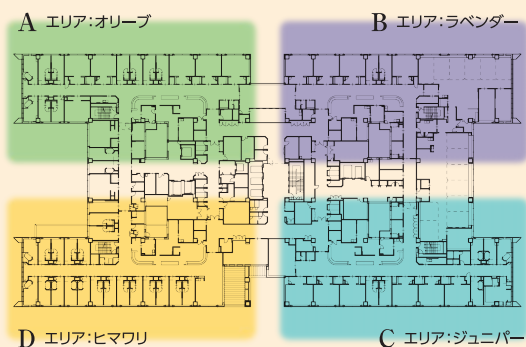
プロヴァンスの風景から抽出したカラーが、みんなの生命力になる。

病棟のカラーには4つの色を選び、内装にも反映させています。南フランス地域の強い光、暖かな気候、土地の持つ生命力のエネルギーを取り入れたいと考えたからです。明るさや希望は、必ず病院のプラスになります。日々の活力が生まれたり、やる気が出たり、ホッとできる環境が創造できていたらうれしいです。

デザインが誰のためにあるのか？を見失ってはいけない。

私が病院建築に携わるのは、今回が7件目です。設計会社やデザイナーの当初のご提案からは、かなり大きく方向性を変えました。私たちが描く病院の基本コンセプトや必要としていることを理解していただきながら、検討を進めました。デザインが誰のためにあるのか？その主体は患者さんであり、同時にスタッフのためでもあるということを見失わずに、建築設計がなされることが大切だと考えました。

病棟のエリアとテーマカラー



プロヴァンスの風景から抽出したカラー



1Fの内視鏡受付。穏やかなアールを付けたカウンターや天井の形状、明るい色彩、間接照明などが気持ちを和ませる。

医療安全管理者さんからの声

ポータブルトイレの使用が減少した効果は大きいです。



医療安全管理者
荒木妙子さん

今まではポータブルトイレを使っていましたが、転倒やにおいなどの問題がありました。その使用が減少したことは大きな進歩です。医療安全の立場からは、低床ベッドや角を丸くした低いカウンターの採用、離院防止にもつながるセキュリティの充実など、多方面において環境を大きく改善できたと感じます。

看護副部長さんからの声

スタッフも大切にされている環境だと感じます。



看護副部長
小林比呂子さん

病院全体のデザインは生命力にあふれた南フランスのプロヴァンスのイメージが反映され、明るさを感じる場所がいいですね。職員用レストランは眺望の素晴らしい最上階にあり、食事のメニューも充実。周囲を広く見渡せるスタッフステーションには業務に集中できるスペースもあり、スタッフも大切にされていると感じます。

感染管理認定看護師さんからの声

感染対策の要となる手洗器も充実しました。



感染管理認定看護師
須田江津子さん

トイレは清掃しやすい壁掛けタイプにして、おいの問題も解消しました。感染対策の要と言われる手洗器は数を増やし、水はねの少ないものや肘まで洗えるタイプ、非接触の自動水栓を導入。さらにスタッフステーションの入口、スタッフ用の各トイレ内にも手洗器を設置しました。設備環境が大きく前進してうれしく思います。

法人事務局の方からの声

参加型プロセスでの、みんなの環境づくりでした。



法人事務局長補佐
福田明男さん

手術室一つをとってもデザインにこだわり、天井をアール型の造作にしたり、色や照明によって、患者さんの緊張をほぐし気持ちが和む効果を演出しています。移転においてはデザインやサイン計画も含めたさまざまなワーキンググループを立ち上げ、スタッフの力を結集しながら検討を重ねた結果が、みんなの満足につながりました。



スタッフステーションには、全方向に見守りやすいアール形状のカウンターを設置。廊下突き当たりの窓からは自然光が明るく降り注いでいる。

患者さんの状態に合わせて アプローチの仕方が選べるトイレも。

すべての個室にはトイレを設け、患者さんが自力でトイレに行きたいと思わせる動線や設計にしています。一部の個室には、両開きタイプのトイレを採用。2枚引戸で開くことも、開き戸で開くことも、両方開けて車いすでアプローチすることも、ベッドを便器のところまで付けることもできます。個室には八角形のトイレ・シャワーユニットを採用しているところもあります。また、4床室用のトイレは、廊下からアクセスする、左右勝手を考慮した分散型のトイレに。来院された方が利用できるトイレは、男性用の床をブルー系、女性用をピンク系にするなど色でも明確な区別がなされています。



個室内のトイレは両開きタイプもあり、利用する患者さんの状態に合わせてアプローチすることができる。車いすで移動しやすいのももちろん、便器のところまでベッドを付けることもできる。



窓が広くて明るい3Fの個室。八角形のトイレ・シャワーユニットを採用している。



1Fの男性用トイレ。トイレブース内には壁掛けタイプの大便器や、背もたれ、L型手すりを設置している。



3Fと4Fの多機能トイレには、尿流量測定装置を採用。患者さんが自分で測定することができます。



1F女性用トイレの手洗器。



内視鏡検査室専用トイレの一つには、オストメイトのための設備も備えられている。



スタッフステーションの入口に設けられた、水はねの少ないスタッフ用手洗器。

独創性、迅速性、連携性、継続性、柔軟性。5つの要素を大切にしたオンリーワンの建築設計。

建築計画において大切にしたのは、独創性、迅速性、連携性、継続性、柔軟性です。まずは、オーダーメイドでオンリーワンであることが求められる、建築における独創性。埼玉石心会病院では多くの会社とのコラボレーションを行いながら、アート・照明・サイン・内装などを展開しました。

迅速性では、救急病院における「スピード」を重視し、動線短縮

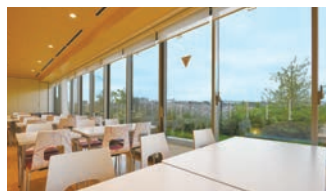
を徹底した低層建築を展開。連携性では、患者さんやスタッフのことを考えた1フロア4看護単位の病棟とし、地域やグループ内での連携も考慮しています。継続性では、災害時にも医療を継続できる構造と設備を整備。そして柔軟性では、変化への高い対応力を持つ長寿命建築としています。



3Fに設けられたシャワー室。照明にも工夫を施し、明るさを演出している。

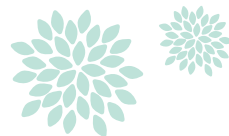


最上階の6Fに設けられた、誰もがゆったり食事を楽しめる一般用レストラン「ラベンダー」。



同じく6Fの職員用レストラン「プロヴァンス」。富士山や秩父連山を眺められる眺望の良さも、日々スタッフを支えている。

いのち 生命を癒すパワーとなる バイオフィリックデザイン。



自然の現象、色彩、素材、形態など、生命を宿すものたちへの魅力、それがバイオフィリアです。埼玉石心会病院では、自然の要素がこの場所に息づく生命を癒し、力を与えるように、このバイオフィリックデザインを施しました。患者さん、見舞客、スタッフなど、日々たくさんの生命が同じ時間を共有する空間で、それらは病を癒す力を高め、心の負担を和らげる薬にもなります。さまざまな人が等しく感じる「癒しのデザイン」が、この場にあります。



設計担当の方からの声

自然環境による治癒力も大きいと感じます。



株式会社山下設計
東京本社
第1設計部 部長
宮本一平さん

患者さんの視点では、自然環境による治癒力も大きいので、窓を大きくして外の景色や光を採り込むこと、木目や優しい色づかいで緊張感を和らげてあげることなどが大切だと思います。また、看守りやすさなど、スタッフの視点で働きやすい環境を創造することも、さらに充実した医療の提供につながっていくと思います。

設計担当の方からの声

トイレへの移動のしやすさも考慮しました。



株式会社山下設計
東京本社
第1設計部 主管
高橋彰仁さん

患者さんが高齢化・重症化し、安全対策は重要度を増しています。病室では移動しやすいトイレにすることを考えて、引戸と開き戸による両開き扉にするなどオリジナルの工夫を施しています。サインの色づかいは、単色にしてしまうのではなく、色の濃淡なども考慮しながらバランスを取って、一歩進んだデザインにしています。

Column

～ 病院のインテリア設計について ～

オンリーワンの建築において、インテリア設計はとても重要です。



株式会社山下設計
東京本社
インテリア設計部 主管
小畑真紀さん

■ 日常を思い出してもらふことなども、インテリアにできること。

病院のサインは、初めて訪れた方が何の説明もなく目的の場所に行けるように誘導できることが理想です。そのためには、色や大きさ、全体としての気配の醸成などを考える必要があります。この「導(しるべ)」については、光も大きな要素となり、明るい方へ歩いて行きたくなる人の心理も利用しながら間接照明によって誘導しています。インテリアにできることは、緊張感や不安、ストレスのある方に対して、ホッとしてもらったり、日常を思い出してもらったりすること。病院を非日常の場にしないことも大切だと思います。

■ 色によるエリア区分は、無意識に感じる「しかけ」でもある。

色によるエリア区分は、行き先の案内をしやすだけでなく、無意識に感じながら場所を認識する「しかけ」として有効だと考えています。また、弱視の方も一定の割合でいらっやるので、床・壁・天井にコントラストを付けるなどの工夫も施しています。

病院はタパーが多く、堅牢性や清掃性、安全対策や感染対策など絶対に欠かせないことが多い場所です。そうした中で、いかにもっとも良い環境を創るか優先順位をつけながらのチャレンジを、どこまで踏み込んで行っていくか。その姿勢がとても大切ではないでしょうか。

階段室の壁面アート



リハビリの場にもなる階段室も、閉塞感を解消したテーマのある空間とし、花のイメージと狭山市入間川の花火のイメージを重ねたデザインを施している。